

エレミヤ書43章7節 「エジプトに戻る民」

1A エジプトに行ったユダヤ人

1B 背景

2B 理由

2A 主の御声への不従順

1B 守ろうとされる主

2B 不信仰の印

3A 入口まで来られる主

本文

エレミヤ書 43 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは前回で、39 章まで来ましたが、今日は 40 章から 43 章までを午後礼拝で読みます。今朝は 43 章 7 節に注目してください。「**エジプトの国に行った。彼らは主の御声に聞き従わなかったのである。こうして、彼らはタフパヌヘスまで来た。**」ハフパヌヘスは、エジプトの入口にある町です。彼ら、ユダヤ人たちがエルサレムから南に下ってきて、エジプトにまで行ってしまった、ということでもあります。40 章から 44 章までに、エルサレムがバビロンによって破壊された後の、ユダヤ人たちの姿を描いていますが、彼らは最後の最後まで、主に聞き従いませんでした。最後はエジプトで偶像礼拝をしている姿で終わります。

1A エジプトに行ったユダヤ人

1B 背景

エルサレムの破壊後、ほとんどの人が殺され、また捕えられていきましたが、僅かに貧しい農民は畑を耕すように残されました。そして、バビロンはゲダルヤというユダヤ人を、バビロンの総督にしました。僅かに残されているユダヤ人の長にしたのです。すると、その噂を聞きつけた、周囲の国々に逃れて潜伏していたユダヤ人がやってきて、小さな共同体を持つことができました。ところが、イシュマエルというユダの国の王族の一人が、なんとゲダルヤを殺します。けれども、この企みを予め、将校ヨハナンがつきとめていました。イシュマエルの一味は、ゲダルヤのところにいるユダヤ人を誘拐していくのですが、ヨハナンたちがやってきて、救い出します。

そしてヨハナンたちは、思います。「バビロンが任命した総督を、ユダヤ人が殺してしまった。バビロンはこれでは済ませないだろう、我々を殺すに違いない。」そう思って、エジプトに全てのユダヤ人を連れて行くべく、南に下っていく準備をしました。ベツレヘムまで来た時に、エレミヤに主に伺いを立てるように願うのです。それでエレミヤは祈りました。すると神から声があったのです。それは、「バビロンの下に留まりなさい。」というものでした。バビロンに服していれば、あなたがたは生き延びることができる、というのは、捕囚の民に語られていた言葉ですが、今やエルサレムがバビロンのものとなったので、彼らも服していれば助かるということです。ところが、彼らは言うこと

を聞きませんでした。そのままエジプトに行ったのです。それがここの言葉の話の背景になります。

そして、この話は旧約聖書全体で見ても、イスラエルの歴史の中でとてつもなく悲しい出来事となっています。エジプトという国にイスラエル人が戻るということです。イスラエルは、エジプトから救われたことによって、自分が神の民であることを知りました。すなわち、エジプトは「この世」を表していました。彼らが奴隷であったけれどもそこから解放されたように、私たちもこの世で罪の奴隷であったところが、キリストの血によって解放され、神の民となりました。その贖いの歴史が、出エジプト記です。

イスラエルの歴史の初めに戻ると、アブラハムが主に命じられてカナン之地に来て、それでそこを神は約束の地とされました。ところが、飢饉が来てアブラハムの家族はエジプトに行ったのです。そこは沙漠地域であります。ナイル川が流れているので緑があり、作物が育ち、大きく栄えていたのです。いわゆる「エジプト文明」と呼ばれているもので、栄えていました。それでアブラハムは南に下りましたが、エジプトで大変な目にあいました。パロが自分のサラを、自分の女にしたいと思っているだろうと考え、自分が夫であるならば殺されるのではないかと恐れ、それで彼女を自分の妹と言ったのです。それで、パロの妻になり、アブラハムはパロから金や銀を受けます。ところが、神がサラを守ってくださり、パロの家に災いが下ります。それでパロは、彼女がアブラハムの妻であることを知り、それでパロはアブラハムを責めます。それでエジプトから出てきます。このように、神に約束された所から出てきて、豊かなところ、安定したところに頼ろうとしたら、誘惑、罪、混乱の渦中に置かれました。

それで戻ってきましたが、ヤコブの家族がヨセフの要請でエジプトに下りました。そこで彼らは増えて、強くなってきました。そこでエジプトのパロは彼らを労役で虐げて行ったのです。彼らは苦しみの中で声を挙げました。主がその苦しみを見て、聞いたので、モーセとアロンを遣わされました。それで、そこから神の民を出すようにパロに命じられます。そこからイスラエルは連れ出され、そして分かれた紅海の中を通過して、エジプト軍はその海に沈み、それで彼らは救われたのです。ですから、イスラエルによってそこは奴隷の国であり、そこから解放されて神のものとなりました。そして主は、二度と奴隷に戻ることをないようにさせるべく、例えば貧しい人が土地を売り渡さなければいけないとき、近親者が買い取るという命令を定められました。また、奴隷を雇っても七年後には解放しなければいけないという戒めも与えられました。また在留異国人に、同じような苦しみを与えてはいけない、憐れみを示しなさいと言われました。過越の祭りを守りさいと言われて、自分たちが自由にされたことを毎年思い起こすのです。

しかし、エジプトは魅力に満ちていました。シナイの沙漠を少し旅すれば、そこにナイル川が流れる大きな文明があります。緑があります。学問があります。それだけでなく、神々もあります。いろいろな罪の楽しみもあります。

そして、ソロモンが王となって初期にめとったのは、パロの娘でした。エジプトは大きな国で平和を保つために政略結婚したのです。そして馬をエジプトからたくさん購入しました。このような政治や軍事にソロモンが頼るようになったのも、エジプトを通してです。そしてソロモンが死んだ後は、王国は分裂しました。北イスラエルの王ヤロブアムは、一時期逃げていたエジプトで見た金の子牛を、自分たちの祭壇として、それをもって主なる神に仕えているとしたのです。

そしてヒゼキヤの時代も、またヨシヤ以後の時代も、エジプトは大国に対抗するための援軍としての誘惑がありました。北からアッシリヤが来ました。また後に北からバビロンが来ました。ですから、南の大国エジプトに拠り頼みたくなったのです。しかし主は、シオンにこそ救いがあると言われたのです。ヒゼキヤもエジプトに助けを呼ぼうとして、エルサレムを取り囲まれる失態を犯しましたが、けれども、主の宮にいて祈り、主がアッシリヤから救われます。そして、ゼデキヤ王の時、バビロンからエルサレムの包囲を一時解除することができたのは、エジプトが戦いにやって来たからです。それで誤った期待を彼らは持ったのです。降伏さえしていれば、町は守られたのに、この誤った期待で反逆して、それでエルサレムは滅ぼされました。

いかがでしょうか、エジプトがいかに彼らの信仰を駄目にしていく、まさにこの世の力、知恵、罪、誘惑を示していたことか！そして今、エジプトに戻ってきました。実に約 860 年後に戻ってきたのです。これが、信仰から離れて、この世に戻ったということが、彼らは歴史の中で、民族として経験したのです。ペテロも、クリスチャンに対して再び世に巻き込まれることについて警告しました。「2ペテロ 2:20 主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。」

2B 理由

ではなぜ、エジプトに行ってしまったのか、その理由を考えてみましょう。最も大きな理由は、「恐れ」でした。「41:18 それは、バビロンの王がこの国の総督としたアヒカムの子ゲダルヤをネタヌヤの子イシュマエルが打ち殺したので、カルデヤ人を恐れて、彼らから逃げるためであった。」とあります。恐れが、彼らをエジプトに向かわせました。神を信じることと、恐れることは、相反するものです。恐れるならば、信じていません。信じているならば、恐れは締め出されます。「ヘブル 10:38 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」

なぜ、恐れが出てくるのか？主に従おう、主の言葉に聞き従おうとする時に、恐れが出てくるのは、自分以外のものに身を任せるからです。信じるとは、主ご自身に、その言葉に自分の身を任せることそのものです。水の上を歩いてイエス様のところに歩こうとしたペテロのように、主の言葉に従うのは、自分で自分を守るという行為を捨てることになるからです。それはあたかも、サーカスの空中ブランコで、ブランコの相手に向かって飛んでいくようなものです。自分がブランコから離れ、相手に自分をキャッチしてもらいます。ゆえに、信じるということはいつも、恐れとの戦いが起

こります。そして言い換えれば、恐れとは自分を守っていたい欲望です。自分が主となっていたい、心の王座に自分が着いていたいという欲望です。こういう訳で、恐れと信仰は相容れません。

恐れは、私たちに罪を犯させます。私たちは前回、ユダの最後の王ゼデキヤがなぜ主の言葉を聞かなかったのかを学びました。バビロンに服したら、先に投降したユダヤ人によって殺されるかもしれないという恐れがあったからです。エレミヤは、そんなことはおこらない、神が守ってくださると教えました、ゼデキヤは信じませんでした。それで、災いが彼の上に乗ったのです。

イエス様をユダヤ人指導者が殺すことに決めたのも、恐れからでありました。カヤパが、イエス様についてこう言いました。「ヨハネ 11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」ユダヤ人指導者にとって、ユダヤの土地、またユダヤの民も、今の神殿礼拝の制度を保ってられるなら、安泰です。けれども、イエス様の活動によってユダヤ人の中が不安定になって、それでローマが鎮圧に来るのではないかと恐れたのです。自分の安全圏、快適な空間が侵されることを恐れ、それでイエス様を殺すことに決めました。イエス様に付いていたペテロは、カヤパ邸の所まで言ったのに、イエスを知らないと言ってしまったのも、恐れたからです。ピラトも同じように、ユダヤ人たちが騒動を起こすのではないかと、そしてこのことが皇帝に知られたら、という恐れがあって、それで十字架刑に処しました。

そしてもう一つ、彼らがエジプトに下ったのは、楽をしたかったからです。「『いや、エジプトの国に行こう。あそこでは戦いに会わず、角笛の音も聞かず、パンにも飢えることがないから、あそこに、私たちは住もう。』』と言っているのなら、(42:14)」と彼らは言うと言え、エレミヤは預言しています。私たちはもちろん、戦いをしたくないです。また、いつも食べることができるような環境がほしいです。神を信じることによって、神によってのみ必要が満たされるという経験ですが、神なしで満たされたいという欲望であります。彼らは、楽を求めてエジプトに行こうとしていました。私たちには、いつも楽をしたいという誘惑がありますね。経済的に楽をして、神に祈り求めて、導きを待つというようなことはやめよう、ということになってしまいます。そして楽をするとどうなるかという、まことの神ではなく他の神々を拝むようになります。神以外で自分が満たされるためのものが、必要ですから、あらゆるものが神となります。これが世ですね、エジプトが富があり知恵があると同時に、神々がたくさんいたのは、密接につながっています。富があり、学問があれば、神に頼らずに済みます。そして神以外のもので、自分が霊的に満たされないものを他の何かで満たそうとするのです。

しかしユダヤ人は、昔、エジプトでどんな苛酷な目に遭ったか忘れていてのことでしょう。けれどもエレミヤは、かつての時と同じようにエジプトで楽をしていても、つかの間であり、バビロンがエジプトにまでやって来て、剣と飢饉、疫病がやってくることを預言しました。私たちも、一時的に楽をしたい、また罪を楽しみたいと思った時に、罪の虜となっていた時の苦しみを忘れていてのです。「ローマ 6:20-21 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。そ

の当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。」

そして彼らは、神を考慮に入れていなかったために、エジプトに下りました。彼らはカルデヤ人がいかに恐ろしいか、その力はよく知っていました。バビロンの力は見えました。けれども、神の力がもっと偉大なことは忘れてしまっていました。私たちはしばしば、「こんなこと言われても、現実の生活があるからね。」と言います。全くその通りで、生活で起こっていることは現実であり、力のあるものです。しかし、神の力も同じように現実なのです。その神の現実を体験できるのは、やはり信仰によるのです。イスラエルがシナイの荒野からカナンの地に入る時に、十人のスパイが見ると、先住民が巨大に見えました。しかし、神は数々の不思議と力をイスラエルの中で行われました。敵の力はもちろん現実です。しかし、神の力、福音の力も現実なのです。

2A 主の御声への不従順

そして7節をもう一と見てみると、「**彼らは主の御声に聞き従わなかったのである。**」とあります。42章20節の新共同訳は、「**あなたたちは、致命的な誤りを犯そうとしている。**」と言っていますが、これが最も致命的な誤りです。前回学んだように、これはバビロンがエルサレムを攻めることよりも深刻なことでした。私たちは災いが起こるか、起こらないかということが最も大きな関心事ですが、神にとっては、ご自分に言われることに聞いているかが最も大きく関心を持っておられるのです。主の御声に聞き従わせるためには、バビロンにエルサレムを攻めさせるという災いをも用いられたのです。

1B 守ろうとされる主

神は、御声に聞き従いなさいと言われてるのは、私たちが守られるためです。私たちが束縛しようと思って語っておられるのではなく、私たちが危害から守るためであります。「42:11 **あなたがたが恐れているバビロンの王を恐れるな。彼をこわがるな。…主の御告げ。…わたしはあなたがたとともにいて、彼の手からあなたがたを救い、彼の手からあなたがたを救い出すからだ。**」バビロンから救われるために、バビロンから逃げるなど言われます。バビロンは攻めてくるけれども、命は助かります。

けれども、聞き従わないと、自分が避けようともっていること、恐れていることをまさに、自分自身で招いてしまいます。「42:15-16 **今、ユダの残りの者よ、主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『もし、あなたがたがエジプトに行こうと堅く決心し、そこに行って寄留するなら、あなたがたの恐れている剣が、あのエジプトの国であなたがたに追いつき、あなたがたの心配しているききんが、あのエジプトであなたがたに追いつき、あなたがたはあそこで死ぬ。』**」恐れによって反応すれば、その恐れていることが、そのまま自分の身に降りかかるのです。先に、ユダヤ人の指導者がイエス様をメシヤと受け入れず、この者を殺すことに決めたのですが、その時、彼らが恐れていたことがそのままやって来ました。「ローマ人がやって来て、われわれの

土地も国民も奪い取る」とカヤパは言って、それでイエス様を十字架に付けたのですが、けれども、イエス様を拒んだからユダヤ人たちが紀元 70 年に土地も奪い取られ、また民も捕虜として連れて行かれたのです。

2B 不信仰の印

聞き従うのは、信仰の本質を示しています。信仰とは、神の語りかけを聞き、従順の心で聞くことです。主が語られていることは何かを求め、絶えずこの方の言われていることが何かを識別し、そして語られたことにそのまま応答します。ですから、信仰と従順は切り離すことができません。

人は信じることを、「何か行なうこと」だと思いこんでいます。何か自分の心や思いの中で、信じているという状態を作ることだと思っています。これを「信心深さ」と言いますが、それは信仰ではありません。信仰は作り出したり、絞り出したりするものではありません。むしろ従順な心で、受け入れて、聞いていくことです。けれども、従順な心ではなく、自分で何かをすることをいつも考えている人は、「そんなこと言われても、できない。」と反発するだけです。

ヨハナンたちは、それを行ないました。ヨハナンは、能力のある軍人でした。情報収集力がありますから、ゲダルヤがイシュマエルに狙われていることを察知しました。そして、イシュマエルにユダヤ人たちがさらわれたことを知ったら、いち早く、現場まで行きました。このように、彼は自分で計算して、計画を立てて動いていく者でした。エレミヤから、ここに留まりなさいという神の言葉を聞きます。そんな言葉には従えないとなったのです。それは、彼の御言葉に従えない能力の問題ではないのです。むしろ、彼は能力があるからこそ、その肉が従順になるのを妨げていたのです。

しばしば、「御言葉が行なえない」という言葉を聞きます。その時は、自分の能力が邪魔をしています。「そのように信じられたらいいのに」という言葉も聞きます。これも、自分がこれこれをやって、それで次にこのようなことをするという自分の計画があって、神の前に静まっていない、立ち止まっていないという問題があるからです。そうではありません、「イエス様が主です。」と私たちは告白したはずですが、主であるというのは、何が起こっても、この方が一番です、ということです。自分で何かをするのではなく、主人が何をしておられるのか、何を語っておられるのかに耳を傾けるはずですが、そして、主からの命令がきたら、ただそれをやるだけであります。

ヨハナンは祈ってくださいと言いましたが、祈りでさえ自分のしたいこと、しようとしていることの通過点でしかありませんでした。だから、自分の願っていることではなかったのです、拒絶して、無視してエジプトに行ったのです。

そして、ヨハナンや人々の心の中には、真の神に対する願いがほとんどなくなっていることでしょう。自分が計画を立て、計算して動いているのですから、そりゃあ、神を知りたいと願う必要がありません。私たちが計算し、物事の損得勘定で生きると、神に何かをしていただくなんていう余地は

全くなりますから、結局神ご自身を求めることも意味がないと思って、見捨ててしまうのです。なんで、興味を持たないのか？また、持たなくなってしまうのか？それは、自分がこれこれを行なって、次にこれこれをするという世界で生きてしまっているからです。それで、信じて生きると言われても興味が失せてしまいます。これが、エジプトの世界です。

3A 入口まで来られる主

こうやって彼らは聞き従いませんでした。しかし 8 節に、「タフパヌヘスで、エレミヤに次のような主のことばがあった。」とあります。これは驚くべきことです。エレミヤは彼らにエジプトにまで付き合っていました。これはエレミヤがというよりも、神ご自身が彼らにあきらめず、語り続けられたということです。彼らはまだ見捨てられていませんでした。主がまだ語っているということは、それが裁きの言葉であっても、へりくだって悔い改めれば、神は憐れみを示してくださるからです。

まだ遅すぎません。このことに不従順であったから、私はもうおしまいだ。神から認められていないとあきらめている方、いいえ、そんなことは絶対にありません！神は、そこにおられて、そこから語ってくださり、決してあきらめることはないのです。ですから、勇気を出して主のところに戻ってみましよう。そこから主は必ず、その場所から回復の業を行なってくださいます。ゼデキヤも、バビロンに服さなければいけないけれども、それで命が救われるという約束をもらいました。残ったユダヤ人も、神が見捨てられている、どうせ、という思いがあったかもしれません。けれども、そこから本当はスタートできるのです。そして、全く気づかないで無視していきつく所まで行ってしまったとしても、またそこから語ってくださるのです。主は諦めません。人生のどこにおられようが、主は語られています。